

「ありがとう西高！」新聞

Mail : nishikouarigatou@gmail.com

twitter : @nishiko_arigato

Hashtag : #ありがとう西高

発行元 : 「ありがとう西高！」実行委員会 広報室

「最後の西高祭」盛大に開催

9月7日、8日の二日間にわたって、第56回西高祭が開催された。来年度より「さいたま市立大宮国際中等教育学校」へと変わることに伴い、西高生のための文化祭としては実質的に最後の文化祭となる。

「ありがとう西高！」委員会も西高祭を盛り上げるため、多方面で活躍する卒業生によるイベントを催した。



視聴覚室で開催された卒業生によるトークセッション。

卒業生も参加して母校へ恩返し！

「ありがとう西高！」実行委員会は西高祭の二日間にわたり、卒業生によるワークショップ、トークイベント、そしてピアノコンサートを開催した。

ワークショップでは、エアブラシを使ったお絵かき体験、「ありがとう西高！」と印字された革キーホルダー等が製作できるレザークラフト体験、そして似顔絵体験が行なわれた。

塗装業の松井喜男氏によるエアブラシ体験は、在校生に人気があり、初めての体験に苦勞しながらも、徐々に慣れると自由に絵を描く姿が見られた。また、皮革職人の戸塚健一氏によるレザークラフト体験は、一般来訪者にも人気があり、小さな子が力いっぱい大型プレス機で革に型を押し付けて制作している姿が印象的だった。

漫画家など幅広い分野で活動するあらい太朗氏による似顔絵体験では、在校生から大人

大人まで様々な層の来場者が、あらい氏に似顔絵を描いてもらう。軽妙な語りを入れながら描く同氏の絵は、一人一人の特徴を捉え、人気を博していた。

トークセッションとピアノコンサートは視聴覚室で行われた。トークセッションでは、多方面で活躍する卒業生が各世代の高校時代の思い出を織り交ぜながら、西高の特色を互いに再確認する場面がみられた。

ピアノコンサートは、ヨーロッパでも活躍するピアニスト丸山薫氏による演奏を披露。会場の視聴覚室に美しい旋律が鳴り響き、聴衆を魅了した。「トロイメライ」演奏時には、作曲者であるシューマンが、この曲に込めた想いを解説し、在校生へ「夢をもってほしい」とメッセージを送った。

トークセッションとピアノコンサートは、二日間で150名ほどの来場者数となり、ワークショップと共に大盛況で幕を閉じた。

熱気と歓声 主役は「西高生」

第56回西高祭。重層体育館で行われた開会式は、サイリウムが振られる中、華々しく始まった。文化祭実行委員長、ならびに生徒会長がステージ上で生徒達を煽れば、会場は生徒からの歓声とともに、カラフルな光が激しく揺れる。その後のプログラムでも、アイドルの卒業公演さながらの演出が始まると、まるで、どこかのライブ会場に来ているかのような、聴衆を巻き込んだコールアンドレスポンスが続いた。

学校行事でありながら、異様な熱気と参加意識の高さに包まれたのは、ステージイベントだけではない。唐揚げ店、お化け屋敷、ラムネ売りなど、各教室のありふれた催しの中にも、西高生独自のカラーを色濃く見ることができた。

来年度から新たに中等教育学校が開校する。西高単独開催は最後の年となった。今年のテーマは「花より宮西season final」。単独開催最後を華々しく盛り上げようと西高生は一丸となり、自ら記憶に残るイベントを作り上げていた。

西高ホームページから 本紙がお読みいただけます

このたび、学校側のご協力により、大宮西高ホームページの中に「西高OBのページ」を開設いただきました。こちらから本紙、「ありがとう西高！」新聞(PDF版)を過去紙面を含めダウンロードいただくことができます。お誘い合わせの上、ご利用ください。

大宮西高伝

西高時代に培った「一生懸命な姿勢」

石丸将太さん（CMプロデューサー）

石丸将太さんはCM制作会社、ピラミッドフィルムに勤め、テレビCMのプロデューサーとして活躍している。有名タレントが出演する、おなじみのCMには、石丸さんが携わった「作品」もあるそうだ。

ときに半年以上の制作期間をかけ、100人規模のスタッフを指揮する石丸さん。大宮西高在学中、どのような生徒だったのだろうか。ピソードをうかがった。



西高生だった当時を笑顔で振り返る石丸さん。思い出話は尽きない。

テレビCMを作る という職業

石丸さんはピラミッドフィルムという古参のCM制作会社に勤めて12年。転職が多い業界の中で、10年以上ひとつの会社に務め続けているのは少数派だ。映像制作の中でも「プロデュース」という領域に携わってきた石丸さん。CMプロデューサーという肩書きを名乗るようになったのは昨年。CM制作において、業務進行の最終責任を負う重要なポジションにあたる。

ところで、CM制作の現場には大きく2人の責任者がいるそうだ。それが「プロデューサー」と「ディレクター」である。その棲み分けについて、石丸さんの言葉を借りると「映像を作りたいというとき、ディレクターがアイデアを作るのに対して、プロデューサーは（ディレクターの）アイデアを実現化させることに責任を持っています」。

企画から仕上げまで、多いときは100人規模のスタッフの手によって、3～6ヶ月に

及ぶ制作期間を経て作られる。その大所帯を率いる一人が、石丸さんというわけだ。

恩師から学んだ 「一生懸命」

西高時代の石丸さんは、陸上部の400mハードルに青春を捧げた。「顧問の松本先生が熱血で、ホントすごかったんですよ」。短距離とはいえ最終コーナーに差し掛かると、やはり足が動かなくなる。そこで、松本先生は毎回トラックを伴走して「頑張れ！」と声を掛けてくれたそうだ。「なかなかできないですよね……」石丸さんは当時を振り返る。

松本先生の激励に背中を押され、石丸さんは3年生の時、県大会に進出。私立強豪校揃いの埼玉県南部で、大宮西高が県大会まで進むことは簡単ではなかったそうだ。

「諦めないで一生懸命やれば、平凡なヤツ

でも結構できるんだ」という当時の学びは、現在の仕事にも生きてると石丸さんは語る。時間を掛けて一生懸命頑張れば「一人前」にはなれる。「一流」であるかは分からないが、少なくとも食べていけるだけの力は付けられる。CM業界に飛び込んで12年。恩師から学んだ「一生懸命な姿勢」は一筋の背骨を通している。

「木」は残してほしい

教室から見える木々は、西高時代の石丸さんにとって季節の変化とともに、自身の成長を感じられる存在だったようだ。未来の学校にも「木のような存在は大事」と続けた。木を眺め、教室のベランダでコーヒーを飲むのが好きだった石丸さん。「それを黙認してくれた西高の雰囲気も、ありがたかった」。笑顔で振り返ってくれた。（聞き手：酒井）